

## 新型コロナ禍の下での教育・学修支援

—新入生への支援に留意して—

### 新型コロナ禍における学生相談

2020.10.28  
高石恭子 (甲南大学)

## 目次

1. はじめに
2. コロナ禍での大学生の心理状態
3. 新入生の置かれている状況
4. 今後求められる学生支援

## 1. はじめに

### ➤ 甲南大学の新型コロナウイルス感染症対策の経過

- 2月19日 学園に新型感染症対策本部設置
- 3月 1日 西宮キャンパス入構禁止 (4日間)
- 3月11日 入学式・ガイダンス中止決定
- 3月16日 新学期授業対策会議設置
- 3月23日 前期Web活用授業開始4月20日 (2週間延期) 決定
- 4月30日 学修環境整備等支援費 (5万円) 支給発表
- 5月21日 段階的に対面授業実施を告知 5/25緊急事態宣言解除
- 6月 8日 一部対面授業再開
- 7月 1日 限定的に一部課外活動 (体育会) 再開
  - 8月4日～9月24日 夏期休業
  - 9月23日・24日 新入生歓迎会実施
- 9月25日 後期開始・原則対面授業 対面率76.1% (10.7時点)

\* 学生相談室は4月20日よりハイブリッド体制開始 (対面・電話・ビデオ通話)

## 2. コロナ禍での大学生の心理状態

### ➤臨床心理学からみたコロナ禍

今回のコロナ禍は、大震災などと匹敵する自然災害として、私たちの心と生活に、長期的な影響を与えられられる。

### ➤コロナ禍における喪失とトラウマ

ただし、震災と異なるのは、瞬時に大勢の人が生命を失ったり生活を奪われたりしたわけではなく、じわじわと、あるいは断続的に、個々人によって異なる形で深く傷つき何かを失っているという、見えにくさと共通理解のしにくさがあること。

## ➤ コロナ禍が学生に及ぼす心理的影響

学生はこのコロナ禍の中で様々な体験をしている。

たとえば・・・内定取り消し、留学の中止、部活動や試合の中止や延期、アルバイト中断による経済的逼迫、友人との隔絶、施設や病院にいる祖父母との面会禁止、志望企業の採用停止、親の失職、感染またはその疑いによる差別や中傷、家庭内暴力、身近な人の感染死など

・深刻なトラウマを負った学生にとって、それらを乗り越えるためには長い年月と他者の支援が必要。

・特別なトラウマ体験がなくても、すべての学生は「**本来あるはずだったキャンパスライフの喪失**」という体験の渦中にあることを、教職員はしっかり受け止めておく必要がある。

## ➤ 遠隔授業によって学生が失った実は大切なもの

・・・雑談、余韻、ついで、偶然の遭遇、交差

### ・遠隔授業で学生が得たもの

- ・地理的制約からの解放（遠距離通学者の学習時間の確保）
- ・心身の制約からの解放（障害や病気で通学できない学生の学習機会の増大）
- ・テクノロジーを駆使した新奇な体験
- ・内省的学習環境

### ・授業評価には表れないが失ったもの

- ・対面コミュニケーションの非言語的要素（全身はフレームアウトして見えない）
- ・視線の一致（ビデオシステムを介した対面で視線は合わない）
- ・雑談やちょっとした逸脱、息抜き、ついでの学び、終了後の余韻
- ・人、モノ、知、との偶然の出会い、異文化との交差

東京大学共生のための国際哲学研究センター オンラインワークショップ「遠隔教室」  
2020.4.26 <https://youtu.be/ooN8nYvZhee>

## ➤ 喪失体験後の心の反応の経過

- ①否認 コロナなんてたいしたことない、自分は大丈夫
- ②怒り・イライラ なぜ自分がこんな目に？ 悪いのは○○だ！
- ③取引 今は自分は△△を頑張ろう、そうすればきっとうまくいくはず
- ④抑うつ・無力感 もう疲れた、何をしても仕方がない
- ⑤受容とアイデンティティの再構築 もうコロナ以前の自分や生活には戻れない。新しい生き方を探そう

多くの学生にとって、春休み中①→緊急事態宣言発令中②→前期の活動制限継続中③→夏休みを経て後期が始まった今は④のリスクが高まりつつある。

8月以降、学生相談室の利用件数は例年より増加（特に1年生・4年生）

## 3. 新入生の置かれている状況

➤ 学生生活サイクル（入学期・中間期・卒業期）によって喪失に対する自覚と反応は異なる

（2回生以上は「コロナ禍以前」との比較において喪失を自覚し、それまでに築いた人的ネットワークで補填を試みる事が可能。また、3回生後半～卒業期の学生は、先が見通せない社会への巣立ちの不安が加わり、喪失への反応の深刻度が高い。）

### 【新入生特有の事情】

・今年の新入生は、入学式、ガイダンス、課外活動や学科の新歓への参加、学内探索、アルバイトの試みなどを通して先輩や仲間と交流し、徐々に修学・学生生活に適應していくプロセスを踏めておらず、何らかの方法でその支援が必要。（対面授業再開だけでは補えない）

・新入生はそもそも、自分が「何を失っているか」がわかっていない（デフォルトが全面遠隔授業 + StayHome）。

→「友達ができない」「つらい」「不安」という、漠然とした実感にとどまり、孤立感を深めやすい。家族のサポートが得られない場合はより深刻化する。

・オンラインで教員や事務窓口に「質問できる」しくみはあっても、何をどう訊いたらよいかかわからないことが多く、未解決の問題や不安全感が蓄積している。諦めてしまっている場合も少なくない。

・入学以来、同級生と場を共にする機会がほとんどなく、自分の属するコミュニティ（キャンパス・学部・学科）内での位置（例えば学習の進捗、活動の範囲など）がつかめずに不安が募っている。

#### ➤ 前期末以後の学生相談室での対応状況

・ **特徴的な相談例**（そのままではなく一般化しています）

##### 【新入生の保護者から】

課題が多くつらそうで見えられない。死にたいと泣き出したがどうしたらよいか／前期、全く遠隔授業についていけなかったことに気づいたがどうしたらいいか／子どもはあんなに頑張っていたのに不可だった。成績評価に納得できず、担当教員や教務に問い合わせたが親身な返答がなかったのはなぜか。

##### 【新入生本人から】

前期は遠方の実家にいた。対面授業再開で一人暮らしを始めたが、友人がおらず、何から始めたらよいかわからない／成績の見方がわからない／前期、「不」とついたのがいくつかあるが、留年するのか／必修とは何か、GPAとは／後期の履修登録がこれでよいかわからない／対面授業に出るのが怖い。

## 4. 今後求められる学生支援

「大学等における本年度後期等の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について（周知）」

文部科学省 令和2年9月15日

[https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200916-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)

「この際、大学等における教育は、オンライン等を通じた遠隔授業の実施のみで全てが完結するものではなく、**豊かな人間性を涵養する上で、直接の対面による学生同士や学生と教職員との人的な交流等も重要な要素である**・・・」

「新入生をはじめとする学生生活に悩みや不安を抱えた学生の把握に努め、カウンセラーや医師等の**専門家とも連携して**きめ細かくご対応いただくよう・・・」

#### ➤ 支援においてますます求められる連携力・協働力

・ 高等教育が今後どのように進んでいくかは未知の世界  
→ 学生（保護者）・教職員と専門家と共に寄り添い、連携しながら、新たな事象に対応していく必要がある。

・ これから重点的に必要な学生支援

- ① 新入生に「**学生生活**」（キャンパスライフ）を提供すること  
文部科学省は、**豊かな人間性の涵養＝全人的成長の促進も、高等教育の重要な要素であると**明言している。失われたものをどれだけ回復できるか。
- ② 孤立化する学生（とくに過年度生、一人暮らし等）に支援の手を届かせること
- ③ Withコロナ、Postコロナの新しい社会へ巣立つ道筋を示し、そのための教育・支援を行うこと

➤ 全学横断的な学生支援のしくみ作りを

①学内の専門機関（学生相談室など）を活用する。

- ・新入生の学内ツアーに学生相談室を盛り込む。
- ・入門授業等の時間を使ってカウンセラーがコロナ禍での心の健康管理に関するガイダンスやコミュニケーションに関するグループワークを行う。

②欠席過多・低単位取得の学生は、要支援の最も有力な手がかりであり、放置しない。遠隔授業のため前期に抱えていた潜在的な問題が、今年度は後期に顕在化する。

- ・学科等での個別学修指導面談、教育懇談会での保護者面談などの際に、学生相談室の利用を案内する。
- ・理由の明確でない休退学の申し出の際は、受理する前に一度カウンセラーの面談を受けることを勧める。

③コロナ禍は、不安から「多様性への不寛容」をもたらす。マイノリティの学生への確かな支援のまなざしをもち、体制を強化する。

➤ まとめにかえて

- ・コロナ禍は、大学とは何かを改めて私たちに問いかけている。  
「パンデミック以降に多くの大学が直面したこうした状況を、大学における『身体』の消失として考えることができる」  
大橋完太郎 大学の「身体」は変容する（『現代思想』2020年10月号 特集 コロナ時代の大学 93-101）
- ・「キャンパス・ライフ」（コミュニティの一員として、身体を通して活動すること）は、「知」を創造し、個々人を全人的に成長させてくれる、大学の本質を構成する要素ではないか。
- ・コロナ禍で入学した今年の新入生は、マスクやアクリル板を介してではあるが、ようやくキャンパスのにおいや、音や、学食の味や、人と共にいるぬくもりを体験しつつある。
- ・喪失の傷つきを意識化し、受け入れ、乗り越えていく長いプロセスを共に歩む覚悟が私たちに求められている。